

知求会ニュース

2011年09月

第39号

◎ 学位授与おめでとうございます！

知求会の調査で把握した情報をお伝えします。

後藤恵美(GOTO Emi) 国際学部国際社会学科 2002年3月卒業生

- ① 博士(経済学) 名古屋市立大学
- ② 2009(平成21)年3月25日 第36号
- ③ 「コミュニティを活用した消費者のパラダイム転換モデル」

中島耕二(NAKAJIMA Koji) 国際学研究科第2期生

- ① 博士(文学) 東北大学
- ② 2011(平成23)年1月13日 文博第354号
- ③ 「日本の近代化と宣教師」

洪 映澤(HONG, Young-taek) 国際学研究科第5期生

- ① 博士(観光経営学) 慶熙大学校(韓国)
- ② 2011(平成23)年8月17日 2010(博)第0245号
- ③ 「経済指標を用いた外食産業のビジネスサイクルに影響を及ぼすマクロ環境のイベント分析についてー日・韓の比較研究ー」

これまでの国際学部・国際学研究科出身者の学位取得は、博士(国際文化)(東北大学)・博士(文学)(名古屋大学) / (筑波大学) 2名・博士(人文科学)(お茶の水女子大学)・博士(人文学)(パリ東大学)・博士(芸術学)(筑波大学)・博士(農学)(東京農工大学連合大学院) 2名・博士(国際学)(宇都宮大学)の計9名です。

◎ 宇都宮大学大学院国際学研究科公開授業の案内

平成23年度国際学研究科では、ひろく一般社会人を対象に、「21世紀の共生を考える」を公開授業として、以下の内容で **宇都宮大学国際学部 E棟1階1151教室**と**農学部2号館3105教室**にて開催されます。募集人員は50人、受講料は無料です。申し込み方法は、「公開授業参加希望」と明記し、住所・氏名・連絡先電話番号をご記入の上、「封書」(返信用封筒、80円切手同封のこと)または「電子メール」にてお申込み下さい。

申込み先は、〒321-8505 宇都宮市峰町 350 宇都宮大学国際学部総務係 または Email: koksomu@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp です。

公開授業科目 **国際学総合研究 B (国際化と日本)** 「21世紀の共生を考える」

- 第1回 10月01日(土) 午後2時から4時 **中村 真**教授 国際学部 E棟 1階 1151 教室
【生物学、生理学、心理学】生物学的共生から社会心理学的共生まで」
- 第2回 10月08日(土) 午後2時から4時 **高際澄雄**教授 農学部 2号館 3105 教室
【自然と文学】英文学と日本文学における自然との共生問題」
- 第3回 10月15日(土) 午後2時から4時 **古村 学**講師 国際学部 E棟 1階 1151 教室
【環境と地域】自然保護の権力性とエコツーリズム」
- 第4回 10月22日(土) 午後2時から4時 **磯谷 玲**講師 国際学部 E棟 1階 1151 教室
【市場と倫理】平等主義的分配と競争主義的分配」
- 第5回 10月29日(土) 午後2時から4時 **松尾昌樹**准教授 農学部 2号館 3105 教室
【国家と社会】湾岸産油国型エスノクラシー」
- 第6回 11月05日(土) 午後2時から4時 **丁 貴連**教授 国際学部 E棟 1階 1151 教室
【文学と社会】社会と個人の間で—日本近代文学における私小説と物語の系譜」
- 第7回 11月12日(土) 午後2時から4時 **田口卓臣**講師 国際学部 E棟 1階 1151 教室
【思想と美術】他者としての「私」といかに共に生きるか」

*** 『HANDS next—とちぎ多文化共生教育通信』のお知らせ**

2007年9月20日に、ニューズレター『HANDS』第1号が発行されました。2010年度より宇都宮大学特定重点推進研究グループ通信『HANDS』がリニューアルされ、『HANDS next』として再出発することになりました。

第5号(2011年6月24日)

「2年目のスタート」国際学部教授 **田巻松雄**

『教員必携 外国につながる子どもの教育 Q&A・翻訳資料』

国際学部 特任准教授 **若林秀樹**

シリーズ; 学生ボランティア派遣体験記3

「本人の力を引き出すために」国際学部国際社会学科4年 **大城五月**

「学生ボランティアを受け入れて」益子町立益子中学校 **那花幸子**

「日本からペルーへ帰国した生徒の進学調査について (2011年春)」

国際学部講師 **スエヨシ アナ**

「スリランカ・サルボダヤ運動の「参加」を考える」多文化公共圏センター長 **重田康博**

「グリーンフィールド紅茶園訪問記」教育学部教授 **陣内雄次**

「ボランティア派遣の広報と着任の挨拶として」

教育学部附属教育実践総合センター地域連携部門客員教授 **酒見廣志**

『中学教科単語帳』(日本語⇄タイ語) 刊行記念—座談会—

HANDS プロジェクト コーディネーター **船山千恵**

事務局便り

・HANDS プロジェクトからのお知らせ

『中学教科単語帳』（日本語⇄タイ語）と『教員必携 外国につながる子どもの教育 Q&A・翻訳資料』をご希望の方へ

◎ 掲載記事紹介

1. 毎日新聞 朝刊（平成 23 年 5 月 20 日発行）23 面に、「宇大チームが Q&A 冊子」と題して、「外国人生徒 伸び伸び生活応援」「教員向けに作成」の内容で**若林秀樹**先生の記事が掲載されました。

2. 下野新聞 朝刊（平成 23 年 6 月 5 日発行）16 面に、「先生の「困った」に対応」と題して、「外国人児童生徒指導で手引」の内容で**若林秀樹**先生の記事が掲載されました。

3. 国際学博士第 2 号取得者の**方小贇**さんが、宇都宮大学国際学部 研究論集 第 31 号に『日本語と中国語における「首」を含んだ慣用句の比較』の論文が掲載されました。

5. UU now Vol.25（平成 23 年 7 月 20 日発行）5 頁の特集 宇都宮大学農学部附属里山科学センターに、「農家の知恵と大学の科学の知を融合」と題して、4 期生(国際社会研究専攻)の**平井雅世**さんのコメントが掲載されました。

<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/uunow-pdf/uu25/4-5.pdf>

6. UU now Vol.25（平成 23 年 7 月 20 日発行）9 頁の Welcome to 研究室&ゼミに、「田口ゼミ【国際学部】」と題して、**田口卓臣**先生と学生のコメントが掲載されました。

<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/uunow-pdf/uu25/9.pdf>

7. 広報うつのみや 2011(平成 23)年 8 月号(No.1624)32 頁に、日本語講師として 4 期生(国際文化研究専攻)の**田中瑠美**さん(帝京大学助教)の「ボランティアのための日本語教え方講座(中級)」の案内がありました。9 月 17 日から 10 月 29 日の土曜日、午前 10 時から正午の全 7 回開催。会場は市総合福祉センター(中央 1 丁目)です。定員は先着 20 人で 13,000 円の費用がかかります。

8. 宇都宮大学生涯学習教育研究センターが主催する宇都宮大学公開講座に、知求会のメンバーが活躍しています。

・「地域で支える生と死—新しい支え合いの仕組みを求めて—」講座において、5 名の講師の一人として、4 期生(国際社会研究専攻)の**安藤正知**さんが NPO 法人宇都宮まちづくり市民工房の立場で講師を務めました。

・「里山で米づくりと落ち葉堆肥づくりを学ぼう」講座において、4 期生(国際社会研究専攻)の**平井雅世**さん(里山科学センター特任技術員)がコーディネーターを務めています。

・「韓国語(入門コース・中級コース・上級コース)」講座において、9 期生(国際社会研究専攻)の**崔寶允**さん(博士後期課程在籍)が講師を務めています。

◎ 移転のお知らせ

4 期生(国際社会研究専攻)の**安藤正知**さんが、事務局長として携わっている宇都宮市民活動

サポートセンター(通称サポセン)の場所が、現在の東図書館・東市民活動センターから旧東市民活動センター元今泉館(今泉5丁目)へ移転し、10月1日に新センターをオープンさせるようです。

◎ 国際学部だより

1. 国際学部10期生の小原一真さんの展覧会が以下の通り開催されました。

「東日本大震災 03.11. 小原一真写真展」平成23年6月18日～7月3日 photo gallery Sai (大阪市福島区鷺州2-7-19)

2. 国際キャリア開発プログラム開講

・国際キャリア開発基礎 9月2・3・4・5日(3泊4日学宿形式)

会場・宿泊; NPO法人昭和ふるさと村

・英語で学ぶ国際キャリア 9月23・24・25日(2泊3日学宿形式)

会場・宿泊; 白鳳大学(23日)・NPO法人昭和ふるさと村

◎ 新刊紹介

1. 国際学博士第1号取得者の戸川正人さんと指導教官の友松篤信先生が、本年2月に『日本のODAの国際評価』を福村出版より刊行されました。詳細は以下のアドレスへアクセスして下さい。(http://www.fukumura.co.jp/shinkan.html)

2. 多文化公共圏センターから3月に『年報第3号』が刊行されました。

3. 多文化公共圏センターから3月に報告書『宇都宮大学生国際連携シンポジウム2010 学生とアジア・世界の未来を考える―活動の場を広げる価値―』が刊行されました。

4. 留学センターの戚傑先生が以下の通り本年6月に刊行されました。

Qi, Jie (戚傑). "Diversity and multiculturalism in Japan: what is called into question?" 『Educational Research for Policy and Practice』, 10 (2), pp. 105-114, 2011年6月.

研究室訪問 31 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第31回には国際社会交流研究講座所属のバーバラ・モリソン先生にお願いしました。

「研究室での過ごし方」

バーバラ・モリソン

トントン

はい、どうぞ! かけて下さい。

学生は私の研究室に入ってくると “他の先生の部屋とは違う” と皆思うだろう。私の研究室は広くて、空のような明るい青のカーペットの上に ソファとマッチした椅子があり、

まるで家庭のようです。本棚にはもちろん本があるけど、本と同じように人間が大事です。

第一に、アイデアを生み出すための質問と回答に基づく話し方です。質問は知恵の勾玉と言えるくらい大切なものであって、誰？何？何時？何処？何故？どう？という質問のしかたが弁証法が一番大事な所です。上手に質問すると、役に立つ答えが出てくるし、あまり考えずに質問すれば、役に立たない答えが出て来るのは当然な事である。このような考え方は西洋思想のソクラテスの教育学です。彼によると人間は一人一人の持っている知恵が違って、生まれ付きその人の持つ知恵で十分であり、ただその知恵を引き出すのが先生の役割です。学生は先生と一緒に想像力、考え方、質問のしかたを身に付けます。私の研究室に入って来たら、ソファーに座って、隣にソクラテスがいて、ソクラテス式問答法 (Socratic Method) をするのが大切です。

宇都宮大学では英会話だけでなく、書き方や文章表現も教えます。

そろそろお茶を出しますよ！

もう一人がトントンとドアを叩きます。

はい、どうぞ！

私の研究室に入って来て、ソファーに座っているソクラテスのむこうの椅子に席を取るの
はジェイムズ・ジョイスです。書き方がうまいジェイムズ・ジョイスは、私のお気に入り
です。書く事は人間の中にある目的、心、印象、慈悲を表現して、人生を豊かにする技術
です。こいうふうに考えてみると、ただ事実を覚えているだけでは十分でない。自分自身
の持っている知恵を使って、大事な物を身に付けてゆくのが、人間らしさです。ジェイム
ズ・ジョイスの文章を読んでもどいうふうに言葉を身に付けるのかが、そのすばらし
い文章からうかがえます。(『外国文学 57 号』129-140 頁参照)。文章表現 (A と B) では
brainstorming (つまりアイデアを生み出す) を使うのが作文の出発点である。まずアイ
デアを書いて、集めます。沢山の発想の中でどのアイデアが大切なのかを決めなければなり
ません。これはクリティカルシンキングの出発点です。入門したての学生には“クリティ
カル”の意味が理解出来ません。皆“批判する”と思っていますが、この言葉にはもう一
つ違った意味がある。それは“大事”という意味です。例えば、水は人間にとって、クリ
ティカルであると言える。同じように病院で患者が“クリティカル・コンディション”の状
態で入院していると言った時、患者さんは生きるか死ぬかの状態です。この場合、非常
に気を使わなければならない、大事な状況です。こうした場合の意味でも、“クリティカル”
という言葉を使います。

テレビ番組の中で政治家の話しを聞く場合、クリティカルシンキングを使って、何が大事かを判断しなければ成らない。同じように、記事、テキストどんな場面でも、クリティカルシンキングは役に立つ。情報がいっぱいある21世紀のメディア（テレビ、雑誌、WEB）では人間にとって、クリティカルシンキングは役に立つ。

日本文学と英文学専攻の私が学生とソクラテスとジェイムズ・ジョイスにお茶を出せば、会話のテーマは自ずとカルチャースタディーズにならざるを得ない。科学が発達した人間世界ではカルチャー（文化）が話題に成らなかつたらどうにもならないものです。貧しい人たちにいくらお金を出しても、その人がそのお金の使い方をよく理解しなければ、生活は変わらない。ある人は、家より車が大切なので、家がないのに車を買います。車を買うためにお金を全部使ってしまったので、ガソリン代がなく、車はただ見るだけのものになる。この人は馬鹿な暮らしをしていると思うかもしれませんが、本人にとってはこれがごく当たり前の生活なのです。なぜこの“変”な生活ぶりを当然と思っているかには、理由がある。この理由を発見するのがカルチャースタディーズの目的です。日本国内だけでも、沢山面白い具体例が見つかる。日本では“当然”もしくは“当たり前”なことを分析するのは学生にとって、楽しい研究です。ソクラテスやジェイムズ・ジョイスも私の研究室では楽しく学生と時間を過ごせます。

（2011年8月27日原稿受理）

博士録 13 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第13回目には**梁 智英**さんにお願ひしました。梁さんの過去の投稿文である知求会ニュース第19号「筑波だより」と併せてお読みください。

「宇都宮大学で過ごした4年間の思い出」

梁 智英

足掛け12年間の留学生生活を終えて、韓国に帰ってきてもう2年目に入った。12年間という長い留学生活の中で宇都宮で過ごした4年という時間は、今私が進んでいる道を決める大事な時期だった。私が宇都宮大学に受験しようと思った時に、国際学部という領域がある国立大学は、私が覚えている限り、関西地域では京都大学、関東地域では宇都宮大学ぐらいしかなかった。しかも、国際文化という専門の領域は宇都宮大学が唯一だったのである。特に、日韓文化・文学の比較を専門としている丁貴蓮先生がいることは、宇都宮大学の決め手にもなった。

国際学部では、1年生と2年生のときに国際関係のいろいろな授業と取りながら、卒業論文を書くための下敷きを整える。しかも、国際学部という特徴もあって、英語はさることながら中国語や韓国語などの第二次外国語も学ぶ体制になっている。今、韓国大学の教育の現場で働きながら考えると、このような宇都宮大学のシステムは、学部の特徴をよく生かせ、国際的に必要な人材を育てるいい環境だと思う。

私は2000年4月に入学し、国際関係論、文化人類学、比較文化論、日本文化論などの学期中の授業のみならず、日本史特殊講義、アジア民族音楽論などの集中講義も取りながら卒業論文のテーマを探した。授業のカリキュラムは多く、いろいろなことに興味があったが、大学に入ってくるまえから決めていた日本と韓国関係に関わることをしたいという気持ちは変わっていなかった。そして、2年生の時に取った丁先生の日韓文化交流史という授業で、柳宗悦という人に出会い、それがきっかけで博士論文まで書くようになったのである。もちろん博士まで進むのにはいろいろなことがあった。しかし、丁先生と相談して、早くから卒業論文のテーマを決め、それに糧になる授業を取りながら、卒業した後のことまで準備できた。当時、私は卒業後大学院に進むことは考えていなかったが、丁先生のアドバイスが力になって筑波大学に受験することを決めたのである。

宇都宮は、四季が美しく静かで住みやすいところだ。また宇都宮大学の先生方々は優しく、いつも学生のことに親身になってくれる。したがって、自分が目標としていることがあって、それに対してまじめに頑張れば、必ず結果が出る環境だと思う。特に、家族と離れ他国で一人で心細い思いをしながら頑張らなければならない留学生には、落ち着けることができ学問に邁進できるいい環境なのである。このような環境が整えていたからこそ、4年間の時間が充実できたと思う。

卒業論文のテーマだった柳宗悦と1920年代の朝鮮知識人の関係の研究は、筑波の大学院に入ってからも続けられた。筑波大学院には、2004年4月に人文社会科学の文芸言語専攻の総合文学領域に入学し、2009年12月に『1920年代の柳宗悦と朝鮮』というテーマで博士学位を取った後、すぐ帰国して今は韓国の大学で勤めている。もちろん今も柳宗悦の研究は続けているが、韓国は日本とは研究の場が異なるだけではなく柳に対する認識の差もあって、いろいろ苦悩しながらやっているところだ。でも、日韓交流に重要な意味をもっている柳宗悦に出会ったことは、幸運なことだったと思う。つい最近では、アメリカのある大学で、柳と朝鮮（韓国）に関することで発表する機会があった。日本と韓国ではなく、第三者の国で柳について発表できたことはすごくいい経験にもなった。これらもこのようにして、自分の研究は続けていくだろうと思う。

自分の人生は自分が決めていくものだけど、いい選択ができるような環境の中にいられるのは幸せなことだ。宇都宮から離れて長い時間が経っている今は、その時の記憶が薄れてはいるけど、4年間過ごしながら感じたことや、悩んだこと、考えたことなどは、いまだにも体のどこかに刻まれていて、私の人生を豊かにしてくれる。

(2011年8月1日原稿受理)

知究人 18 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。第39号の第18回目は、名古屋市立大学大学院に進学されていた磯谷研究室 OG の後藤恵美さんと 岩手県立大学大学院に進学されている中村祐司研究室 OG の滝田祥子さんをお願いしました。

「WINDING ROAD まだ遠くて見えなくても 一歩ずつ」

中村学園大学流通科学部 講師 後藤 恵美

私は昨年 9 月より福岡にある大学でマーケティングの教員をしています。卒業して 9 年半、思いもしなかった方向に人生が進んでいます。在学中も卒業後も、何度も壁にぶつかり、立ち止り、悩み多き日々でしたが、曲がりくねりながらも少しずつ大学入学時に抱いていた夢に近づいている気がします。

宇大時代の夢は途上国支援に携わることでした。在学中はアルバイトをしてお金を貯めては様々な国を訪れました。特に強い関心を持ったのが、教育を受けることができない子どもや女性たちと貧困の連鎖の問題でした。ところが、このような状況をどうにかしなくてはという問題意識はあるものの、実際に現場に行くとは何もできない自分。国連や外務省等を将来の就職先として考えてみるも、何となく感じる違和感とそれ以前に足りない実力。最前線で活動する NGO に尊敬の念を抱きつつ、諦めきれない快適で安定した人生。グダグダと悩み続け、結局就職先が決まらないまま卒業し、卒業後は派遣社員、ニート、なんとな〜く会社員等の日々を送っていました。

一念発起して大学院入学を決意したのは卒業して 2 年後のことでした。社会人になって興味を持ち始めた「マーケティング」と「商品開発」を学ぶために地元の大学院に社会人入学。研究テーマは「高齢者向け商品の開発」を選びました。面白くて、難しく、無我夢中で学んだ 2 年間でした。修士課程の途中で地元の文具メーカーに転職し、実際に商品開発やマーケティングに携わることでその面白さ、やりがいにはまっていきました。その後、博士後期課程へ進学し研究を続けました。

大学院修了後は文具メーカーでの商品開発の仕事に精を出す日々でしたが、休暇で訪れたネパールで素晴らしい出会いがありました。その方は長く大学での研究活動に携われた後、退職後にシニアボランティアとしてネパールで畜産関係の活動をされていました。年齢を重ねても、それまで培ってきた知識と経験を活かして途上国での支援活動に携わる方法があるのだと教えて頂きました。そして、その土地の特産物や技術力等を活用した「商品開発」やそれを広く世界の人たちに知ってもらう為の「マーケティング」を教えることも重要な途上国支援であり、もっと経験を積んでぜひ途上国の人たちのために役立てて下さいとの励ましの言葉も頂きました。

それから程なくして、現在勤めている大学の求人を知り、悩んだ末に大学への転職を決意しました。大学では、企業時代の経験を生かして学生たちと共に実際の店舗の販売促進計画を練ったり、企業に新商品の企画提案をするといった活動に取り組んでいます。また、途上国で活動する NGO を訪ね、その取り組みを授業で紹介する機会も得ることができました。

現在は加齢や過疎化等によって不便を感じている高齢者を対象とした商品やマーケティングについて研究を行っています。並行して、企業や自治体と具体的なアクションもスタートしつつあるところです。これらの経験をいつか、途上国の人びとの生活向上に役立て

たいというのが私の夢です。アプローチの方法は違っても目指すところは宇大時代と同じです。まだ遠くて見えないけれど、一歩ずつ進んでいければと思っています。

(国際学部 国際社会学科 2002年3月卒業生)

(2011年8月15日原稿受理)

「所属研究科と研究内容について」

岩手県立大学総合政策研究科 修士1年 滝田 祥子

東日本大震災から約半年が経過し、私の地元である岩手県も復興に向けて歩みだしています。震災当時の生活混乱はなくなったものの、被災地の状況は厳しく、また原発による被害は各地に拡大する一方です。日々、震災の報道を見聞きし、地元被災地の現状を見、その状況を通じこれまでの自分自身の生活を見直すことが多々あると痛感しました。このような状況の下、出身地の大学院に進学したのを機に、何か自分に出来ることはないかと問い、ボランティア活動に参加しながら日々を過ごしています。

宇都宮大学在学中は、中村先生の行政学ゼミに所属し、学部生、院生や留学生のみなさんと一緒にゼミ活動をしました。振り返ると、通常のゼミ活動はもちろんのこと、他大学との交流や自治体への政策提言に参加したことは、今の進路を考える機会になりました。また、卒業論文では、食を利用した地域活性化をテーマに執筆しました。このことをきっかけに地元の活性化のために観光政策について研究し、地元の政策に関し深く学びたいと思い、岩手県の大学院を志望しました。

現在、私が学んでいる岩手県立大学大学院総合政策研究科は、法・経営・経済政策系と環境・地域政策系、公共政策特別コース3つのコースに分類され、私は、公共政策特別コースに所属しています。このコースは公共政策に関するより専門的な知識を身につけるために、主に社会人が対象のコースとなっています。講義は主にディスカッションや個人の発表を中心に展開され、他の院生からアドバイスをいただきながら、国際学部で学んだことを励みに独自の研究テーマに取り組んでいます。

私の研究テーマは、観光行政による地域活性化です。グローバル化が進む現代において、観光スタイルも変化し、体験型の旅行が主流となってきています。また、自治体の施策においても観光が重視されてきていることを踏まえて、今後の自治体の観光政策の在り方や地域の主体である住民がどう観光に携わっていくかを研究していきたいと考えています。

岩手県は大震災により経済が低迷しているなか、今年の6月に平泉が世界遺産に登録決定されました。このことも含め、地元岩手県を含む被災地全体が復興に向けて歩んでいけるように観光の視点から研究活動を行っていきたくと思います。

最後に、この大震災の試練に屈せず希望を持ち、心をひとつにして立ち上がり、一方で一日も早い原発事故の収束を願って止みません。

(国際学部 国際社会学科 2011年3月卒業生)

(2011年8月20日原稿受理)

海外だより 11 第 27 号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、海外在住者の積極的な情報提供を事務局にお寄せ下さい。今回は、韓国に帰国した丁研究室 OB の**洪 暎澤**さんをお願いしました。

「韓国からの便り - 第二の我が故郷へ」

観光経営学博士 **洪 暎澤**(ホン・ヨウンテク)

エピソード 1 - 以前の私、そして最近の私

今年は、私にとって非常に重要な年である。新年早々から、心境と精神状態が複雑で、動揺とストレスの連続だった。果たして、今年は学位取得に終止符を打つことができるのだろうか、という自分への問いに対する答えを聞かなければならなかった。これは、6年以上にわたる日本留学を終え、本国である韓国に帰国してすぐに、ソウルにある慶熙大学大学院博士課程に入学、2009年修了後学位のけじめとして、今年中に博士号を取得しなければならなかったためだ。奔走し煩惱にさいなまれつつ、韓国における学期のスタートである3月から、学位の最終審査である6月まで、「研究室に閉じこもって」過ごした。長く苦しかった努力の末、6月11日ついに「博士号取得」が認定されたのである。つらい時期を耐え忍び学位を取得した後、一番初めに思い出されたのが、私の気性と神経質な言動を我慢してくれた家族だった。

その間、迷惑をかけた家族と知人らに、申し訳ない気持ちと感謝の意を伝えた後、すがすがしい気がした。だが、私の脳裏にはまだ何か心にひっかかるものがあり、空しさを感じながら、しばらくの間ぼんやりと大学の研究室に座っていた。そうだ。それは、韓国に帰国してから、私がいつも大学の講義時間に自己紹介をするたびに、日本での留学時代を紹介しつつ、頻繁に口にしていた「第二の故郷日本、宇都宮」でいただいた「恩」だったのである。

私は、宇都宮大学に留学していた間、丁貴連(チョン キリョン)先生の指導学生として修士課程を終え、「財団法人ロータリー米山記念奨学会から2年間の奨学金をいただいた。つまり、私は自分一人の力で成し遂げたのではなく、私の第二の故郷からいただいたご恩とサポートがあってこそだったということに気が付いた。大学の研究室から、日本にいらっしゃる丁貴連先生にお電話を差し上げた。いつも母のようにご指導くださった丁貴連先生は、まるでご自分のことのように喜んでくださった。本当の意味での満足感、そして達成感はいったいこれだったのである。また、私が肉体として生まれ育った韓国と、私の学問と精神を育ててくれた「日本、宇都宮」は、私にとって真の第二の故郷なのである。留学時代、経済的に大変な時に、奨学サポートをしてくださったロータリークラブのカウンセラーの先生方にも、もちろん博士号取得の喜びをお伝えしたし、先生方も非常に喜んでくださった。電話での報告を済ませた後、私は学位取得後、自分のすべき事と今後の計画について、気持ちが再び慌しくなりはじめた。

丁貴連先生と電話で連絡を取りつつ、依頼されたこのエッセイに書くストーリーについて

での悩みが、一層私を落ち着かなくさせた。この文章を書いている今も、自分の至らない文章能力のために悩んでいる。あれこれつまらない考えをしばし止め、まずは自分の専攻である文化と関連付けて話を進めたい。

エピソード2ー 日本に伝わった韓来文化、そして韓流

最近韓国では、アジアを超えヨーロッパにまで風靡している韓流(ハンリュウ、Korean wave)ブームについての話題と、TV をつけると毎日展開される韓・日関連ニュースでかまびすしい。一方は文化的交流の異文化間交流の花を咲かせる肯定的なニュースであり、もう一方は歴史の見解の相違と領土紛争といった、暗く否定的なニュースである。

元来、日本の古代文化が韓半島からの「韓来文化」だという事実を知らない韓国人はいない。西暦 364 年頃、韓半島の古代国家百済が日本(倭国)との交渉を試みた後、461 年百済王である「蓋鹵王(がいろおう)が飛鳥一帯を基盤に居住した。そのため、飛鳥を中心として奈良周辺に、百済系住民が進出し、百済文化が根を下ろしはじめた。百済から日本へ伝えられた文化を中心にしたこの時代を、日本の大和政権の所在地であり、日本古代国家形成における主要舞台であった飛鳥という地名を取り、飛鳥文化と呼ぶ。飛鳥の語源は、韓国語の「安宿(안숙、アンスック)」にその起源があるが、韓半島から日本へ進出した韓国人が、集団移住して定着した地の名前を意味する。日本古代文化の中心地であり、奈良時代の「都」であった「奈良」という都市名も、韓国語の「国(나라、ナラ)」という単語から由来したものである。飛鳥時代には、百済より仏教・儒教・易学・天文地理学等が伝えられ、当時の科学技術と仏教関連美術・教育といった文化コンテンツにも多大な影響を及ぼした。また、韓半島の異なる古代国家である「新羅」では、日本との文物を交換する、現代で言うところの「国際貿易」を活発に行っていた。この時、新羅から日本に派遣された使節は 38 回にも及び、多くの文化的交流があったことを歴史的記録から窺うことができる。これと関連のある文物と史跡は、日本の東大寺にある宝物庫である「正倉院」で見ることができる。注目すべき点は、ここに楽器と木工芸術品・地図・絵画といった、多数の文化コンテンツが所蔵されているが、ほとんどが韓半島から伝えられた遺物だということである。ここまでは、私が韓日文化と関連して比較研究を行い、研究した歴史的事実であるが、興味深いのは上で述べたように、古代の韓・日間の交流においても、楽器と絵画等が発見されたのは、現在の韓流ブームにおいて見られるように、当時においてもいわゆる演芸と芸能といった、サブカルチャー(sub-culture)レベルの交流もあったのではないかと推測するものである。楽器については、現在のように韓国のアイドル歌手が日本へ渡り、日本で歌を歌ったであろうし、また現在の芸能人や芸能と関係のある様子を絵画に記録し、日本人に見せたのではないかとと思われる。これは、あくまでも歴史的根拠のない私独自の見解ではあるが、これらをただ看過しては、現在ピークの様相を呈している韓流を、単なるサブカルチャーの一時的ブーム(boom)に過ぎないと説明するのでは、現在の韓流はあまりにも広範囲にわたっている。さらには、国家的論争となる「事件」と関連があるため、歴史的推理の蓋

然性程度はあるものと思われる。最近、日本のある俳優が自らのツイッターに、「フジテレビは韓流の番組を流しすぎる。」と批判した事実がニュースとなり、韓日両国間で多くの論争を巻き起こした。すると、日本の著名な科学者である茂木健一郎が、「いつもの愛国主義を捨てないと、日本はダメだ。」と正面から反論したという。私が留学していた 2002 年頃、「ヨン様」ブームから始まり、5 年ほど経過して終わるように思われていたが、現在に至るまで 10 年近くブームは続き、「KARA」と「少女時代」といった韓国のアイドル歌手グループ全盛時代を謳歌している。このように、韓・日間の文化関連ニュースは、最近独島(竹島)等の問題が後押しして、若干の国民的感情が加わり、政治的問題にまで発展している。私が 11 年前、初めて日本を訪れた時、中学生の時に見た「となりのトトロ」に魅了されて日本に留学し、日本の文化的ルーツを観察しようとしたように、現在多くの日本人は、歴史教科書・独島(竹島)問題といった、複雑な事件に深刻な雰囲気にいるというよりは、純粋に韓国アイドルの文化的ルーツを求めて、韓国に旅行しに來たり、韓国と類似した文化を体験すべく、韓国飲食店の密集している東京・新大久保を訪れて韓国料理を食し、韓国の娯楽番組とドラマを見ているのではないかと思われる。少し前にも、韓国ソウルのある飲食店で知人と食事をしていたところ、二人の子供を連れた日本人の家族が、韓国語をまじえながら料理を注文し、飲食店の TV に映し出された韓国の娯楽番組を見ながら喜んでる姿を目にした。さらには、私の母の経営するブデチゲ飲食店にも、時折日本人が訪れ、ドラマ「大長金(宮廷女官チャングムの誓い)」に出ていた韓国のキムチと料理を語り、韓国料理の味わいに感嘆の声を上げる様子が見られた。

また、アメリカの歴史地理学者である、UCLA 大学教授ジャレド・ダイヤモンド(Jared Mason Diamond)は、「歴史における文化の根本は一つの流れから伝わり、近隣国家における相互伝播を通じて、その文化は成熟する」と語った。また、アメリカの人類学者であるダイアン・ダマノスキ(Dianne Dumanoski)は、「地球上のあらゆる人類は、単独で文明を発展させることはできなかった。また、長距離文化の伝播と伝達は、大仰な交易や貿易などを通じたものではなく、小規模もしくは単純ではあるが興味を刺激するものから派生して、一つのグループを形成し発展を遂げてきた。」と語っている。

このように、韓日間の関係は前述の通り、古代文化の交流においても下位文化であるサブカルチャーの伝播が、全体文化に広がった可能性があり、その影響力は国家生成と独自の文化生成に大きな役割を果たしたであろうと仮定することができる。それが、単に演芸・芸能の興味から始まったものだとしても、それは、民間交流の誕生となる重要な相互文化の理解、ならびに学問的にも後に「比較文化学」研究の発展をリードする基盤となりうるものと思われる。

エピソード 3— 恋しい日本、我が 第二の故郷である宇都宮

前述の丁貴連先生と電話でお話させていただいた後、第二の故郷である「日本、宇都宮」が突然恋しくなった。3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震の後、論文の執筆にかま

けていた第二の故郷の安否が気遣われた。だが、それを裏腹に単純な私は、日本に留学していた頃ひもじさを癒やしてくれた大学前のラーメンと、宇都宮駅前の立ちうどん、そして弁当寿司がどうしようもなく食べたくなった。そしてすぐにフライトチケットを予約して、妻と娘を連れて日本行きを決めた。この旅行は 2 歳になる娘の初めての日本旅行であり、妻にとっては初めての宇都宮旅行となった。母のような存在である丁貴連先生は、ご親切にもホテルでの晚餐で私たちを歓迎してくださった。また、ロータリークラブの小林先生のおかげで、ホテルに宿泊させていただき、川名先生にはお宅でホームステイをさせていただきながら、お二人に美味しい日本料理をもてなしていただいた。そして、友人である青柳君のお宅で素晴らしい思い出話を花を咲かせることができた。この旅行で、私と妻はその間韓国で味わうことのできなかった、美味しい「本当の日本料理」に舌鼓を打つことで、念願を果たし、日本人の熱狂するアイドルと会うように、私の「第二の故郷の皆さん」とお会いしながら、楽しく熱狂した。そうだ。私にとっての「日流」は、第二の故郷で「お世話になった方々」そして友人と出会う楽しさである。韓国の作家シン・ギョンスク(申京淑)と日本の作家津島佑子が、互いに送った書簡を元に本を出版して友情を確かめつつ、「国境を超えて互いの友情を語るのも大変なのに、相手を非難して否定的なことを粗探しして、気持ちを傷つけ合うには、人生は余りにも短い。」と語った。

エピローグー これからの私、そして”日本と宇都宮大学にありがたい気持ち”

以前から韓国と日本の国家的関係は、近いが遠いと言われてきた。常に感じることではあるが、私の教えている韓国人の学生の中にも、日本の任天堂のゲームと日本の大衆文化に熱狂している学生がいるが、彼らは本当に日本についてよく知らず、本当の意味での韓・日関係についてはよく理解できない。私は今後、日本と日本文化、そして私の「日流」について、頻繁に韓国の学生に語りかけようと思う。そして、学生を教えながら学び、第二の故郷を思いながら、ソンビ(선비: 李氏朝鮮時代、学問を志し学究に生涯を捧げた学者を指す)としての人生を歩もうと思う。

「最後に、この場を借りて、宇都宮大学の丁貴連先生、石浜先生、佐々木先生、ならびに国際学研究科の全ての先生方、大学院の同窓生と後輩の皆さんに深く感謝し、今後とも良い報告ができますよう精進してまいります。」

(国際学研究科 国際文化研究専攻 第5期修了生)

(2011年8月20日原稿受理)

海外留学今昔 04 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、海外留学経験者および海外留学中の在学者の積極的な情報提供を事務局にお寄せ下さい。今回は、韓国・祥明大学校に留学経験のある7期生 **OG・小林ふみ**さんと同じく祥明大学校に留学していた学部生の**伊佐奈緒美**さんをお願いしました。

「留学体験の意味づけ」

小林（旧姓 広瀬）ふみ

2003年8月、韓国祥明^{サンミョン}大学校より帰国したときから、繰り返し頭をもたげるのは「私の留学は間違っていなかったか？」という問です。

私は大学2年時の2002年8月より一年間、ソウルの祥明^{サンミョン}大学校へ交換留学生として留学しました。以前から「バイリンガルになる」という野望と、「日本語教師になりたい」という希望を持つ私は、第二外国語として丁先生の韓国語指導を受け、当然のように姉妹校である祥明^{サンミョン}大学校への留学を目指すようになります。人見知りをしない性格であり、宇大にも素晴らしい友を得ていた私は「留学先でも友達の輪を広げて、きっと充実した時間を送れる。」というキラキラした気持ちのままソウルへ旅立ちました。しかし、初めて親元を離れ、友人とも距離をとることが自分にとって負担になると気づいたのは、ソウルの下宿先に着いてからでした。

ソウルに着いてからは、半年先に留学していた同じ国際学部の先輩に頼りきりで、何かにつけ助けていただきました。先輩には、後輩というより幼子のお守りをするようなお世話をかけてしまったと、今でも反省しています。

それでも初めの一ヶ月程度は「まだ私も話せないし…」と自分に甘い気持ちがありました。そのままのペースで順調に内向きの生活を始めた私は、下宿先、語学学校、大学の往復のみをくり返すという生活を送るようになります。このときに思ったのは「明治時代の留学生が神経衰弱になったのって、こういうこと？」という過去の偉人たちへの共感(?)でした。

ただ一つ幸いしたのは根っからのモボンセン（韓国語で「模範学生」＝優等生）であった私の性格です。語学学校入学当初はクラスでも下の下という成績でしたが、毎日の予習復習宿題をこなすことで、修了時には答辞を読むまでになります。この語学学校での学習を通して、韓国語の面白さに気付くとともに、日本語を客観的に見直すきっかけを得ることができたと感じています。

基本的に内向きの生活を続けていた私ですが、留学3ヶ月目に「コップの水が溢れ出すように言葉が分かる」という体験をします。今まで耳を通り過ぎるだけだった街の音が、意味をもって耳に入るようになりました。この頃から徐々に、人との交流への拒否感も弱まり、語学学校で同じクラスになった奥様方（私の通ったコースは語学学校発行のビザが不要であった為、クラスには韓国へ嫁いだ方が多くいらっしゃいました。）とも積極的に交流するようになりました。また、大学では留学して初めての親友を得ることが出来ました。彼女の存在が、引きこもっていた私の気持ちを外へ押し広げてくれたと感じます。

また、同じ下宿の日本人の紹介で、新しい下宿へ引越しをしたことも、私の生活に影響を与えました。新しい下宿先のアジュンマ（おばさん）との出会いにより、私の語学力も体重も劇的に伸びました。更に、下宿先で知り合った日本人の紹介でテコンドー道場にも通い始めるなど、ようやく「留学生らしい」生活を送り始めます。

こうして、波に乗ってきたときには留学期間の一年を過ぎようとしていました。後ろ髪引かれる思いで帰国した私を待っていたのは、留学前には考えもしなかった日本における「ヨン様ブーム」でした。韓流ブームの中で、韓国語をひけらかす機会には恵まれました。しかし、「留学の経験をこれからどう活かすの？」と聞かれるたびに居心地の悪さを感じました。輝かしい留学生活を送ってこなかった私にとって、留学をすべきだったか否かが分からなくなっていたからです。

留学への罪悪感のようなものを抱えたまま卒業、就職した私でしたが、当時の職場では思うように自己表現できないことへ不満を感じていました。これがある時、留学時代の自分自身とリンクしました。留学していたときの私は、自分を表現する手段(=韓国語)の不足から心を閉ざすことになってしまっていたからです。これらの経験から、^{なんびと}何人も自己表現する自由がある、という想いを抱くようになります。そして、自己表現を思うようにできないでいる人を手助けできる方法、その一つが語学教育ではないかとの考えに至ります。こうして、10年前から抱いていた日本語教師になりたいという想いに戻ってきました。その考えを実現するため、約4年勤めた会社を退職し、現在は都内の日本語学校で講師をしています。自分が心から楽しいと思えることに、意義を見出しつつこの仕事が出来ていることに感謝しています。

今改めて留学について思うこと、それは、良くも悪くも人生の一部であるということです。「経験を活かすか否かは自分次第」だと言いますが、意識して悩んでも、意識せず過ごしても、留学という経験は自分の中に取り込まれていると感じます。目の前にある選択のうち、たまたま留学の側を選んだのだったと思います。YESと言っても、NOと答えても、どちらも一つの選択です。後輩の皆さんには、必ずしも留学にこだわることなく、自分の気持ちに素直に良い選択をしていただきたいと思います。

自分を捉え直し、今の自分を作る経験を下さった全ての方々に感謝を捧げ、私の留学体験記としたいと思います。

今回の震災でお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。

(国際学部 国際文化学科 2005年3月卒業生)

(2011年8月8日原稿受理)

「韓国祥明大学 交換留学」

(2010年 9月～2011年7月) (大学3年後期～4年前期)

伊佐 奈緒美

こんにちは。今回は私の韓国へ交換留学生として留学したこと、その後についてお話ししたいと思います。私はソウルにある祥明大学の日本語教育科へ留学しました。交換留学は私費留学より費用がかからず、寮も無料でしたので、経済的にも助かりました。宇

都宮大学からは**2人**での留学でしたので、寮も**2人**で**ルームシェア**でした。祥明大学へは日本人留学生がなんと私たち**2人**だけということもあって、あとは、ほとんど中国の方でした。オリエンテーションもすべて中国語で、戸惑ったことを今でも覚えています(笑)。

勉学面では、初め、韓国語を読み書きできる程度で、意思疎通もできず、毎日辞書を持ちながら、ジェスチャーをしながら、なんとか過ごしてきました。授業もやっと着いていける程度でしたので、毎日が必死でした。しかし、教授先生が色々助けてくれましたし、頑張ったかいあって、とても良い成績をもらえることもできました。冬休みがとても長かったので(12月中～2月末まで)祥明大学の**語学学校**にも通い、毎日韓国語を勉強していました。ここでも日本人は**2人**だけでしたので、先生とお話する機会もたくさんありましたし、日本について質問されることが多かったので、**日本に対する知識**も増えたと思います。

勉学以外の面では、友達ができるかどうか不安もたくさんありましたが、自分から積極的に話しかけて、学校の行事も参加し、1人でも色々なところへ行きました。韓国の大学生は自宅生が多いので、お家へ招待されたこともたくさんあり、韓国の家族重視の考えといえますか、**家族の絆**の強さにも感動しました。また、**中国**の方とも接することも多かったので、中国の友達もたくさんできました。

楽しかったことがとても多いのですが、中にはやはり、つらかったこと、日本に帰りたかったこともありました。また、外国人だからということで弱い立場にいるからこそ、もっと強くならなければと思えましたし、日本に帰国した時は、絶対出来るようになって、**日本でなら出来る!**と思うこともありました。ですので、精神的にもとても成長できたと感じております。

留学前に日本で友達になった韓国人の友達(宇都宮大学へ留学に来ていた方々)にも会うこともできましたし、言葉にならないほど、とてもお世話にもなって、現在どのように恩返しをするか計画中です。(笑)本当に私のことを助けてくれた方々ですので、日本にきた留学生を今度は私が力になることができるなら力になりたいという思いが強くなりましたし、やはり、**人間関係は大切**だと感じました。

交換留学は**5年**で卒業する方が多いのですが、私は**4年**で卒業を目指し、ゼミの丁先生とメールのやり取りで必修は履修することができ、とても感謝しております。

私が、このように韓国へ留学することができたのは、**周りのサポート**があってこそ可能になったことなので、**感謝の気持ち**でいっぱいです。価値観も変わり、視野もとても広がったと感じています。留学は語学の勉強は勿論だと思うのですが、それ以外で学べること、得られることが必ずあると思います。私も、この思い出は**人生の財産**ですし、本当に**留学して良かった**と感じています。まだまだお話ししたいことはたくさんありますが、今回はこの辺で失礼いたします!

みなさんも、ぜひこの宇都宮大学にある交換留学制度を活用して留学してみたいかでしょうか?

最後に3月に発生した地震について、私はその時韓国にて合宿中で、日本語教育科の方々、先生と一緒にいました。ニュースを聞いた時は頭が真っ白でしたし、日本に電話してもつながらない状況、とてもパニック状態が続きました。しかし、友達、先生の支えもあり、何もできない環境でしたので、募金するなど出来る限りのことはやろうと思い過ごしてきました。そして、韓国の町のあちらこちらでも、「日本負けないで」「日本を応援します」などという横断幕が掲げられ、とてもうれしく感じたこと、私自身の愛国心が強くなったことを覚えています。私に出来ることは何なのか、日本に帰って何ができるのか、出来る環境にいるならば全力でやろうと考えました。この場をお借りして被害にあった方々へ心よりお見舞い申し上げます。

(国際学部 国際文化学科 4年在学生)

(2011年8月13日原稿受理)

NEW

キャリア指南 02 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPOや企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。第2回目には友松研究室OGの吉澤有紀さんをお願いしました。

「将来の自分を楽しみに一選択肢に遠回りはありません」

特定非営利活動法人 難民を助ける会 吉澤 有紀

私は現在、アジアやアフリカなど世界14カ国で活動をする国際NGO「難民を助ける会」で働き、4年目になります。難民を助ける会は、途上国にて、紛争・自然災害により発生した難民や被災者に対する緊急支援、地雷・不発弾対策、障害者支援、エイズやマラリアなどの感染症対策、日本での啓発を活動の柱にしています。その中で私が担当しているのは、日本で活動を支えてくださっている支援者の方々へのお礼や活動報告を出したり、より多くの方に支援してもらえるよう広報をすることです。

“国際協力”と言えば、途上国に行き、現地の人に直接支援活動をする、とイメージをされることでしょうか。私も大学在学中はそう思い、途上国に行き働きたいと思っていました。ですが、今の職に至るまでの経験を通して、日本で行う国際協力の仕事に魅力を感じ、現在の自分の仕事に誇りとやりがいを感じています。

大学在学中は、NGOのスタディーツアーで途上国を訪れたり、NGOのセミナーに足を運んだりしました。就職活動では、国際協力機関やNGOに入ることは難しく、進路に悩みました。その時、参加したセミナーでの経験を思い返し、民間企業へ進む道を選びました。セミナーで多くの社会人の方と出会い、意見交換をした中で、社会人だからこそ見える世界があるのだと感じ、国際協力の一部分しか見えていない自分を痛感しました。不確かではありましたが、まずは社会に出ることで見えるものがあるのだらうと信じ、IT関係の企業へ就職しました。

企業で働いてすぐに、「国際協力」や「途上国」は日本人にとって遠い存在であり、関心をもってもらい難しさに直面しました。今考えれば当たり前のことですが、その当時、毎日途上国支援のことを考え、理解し合う友人に囲まれていた私にとっては大きな衝撃でした。また、休日は NGO 活動に携わり、ここでは支援の主体となる NGO を運営するためには、まず日本人に途上国の状況を知ってもらうことの重要性を実感しました。

この2つの経験を通して、私の関心は日本で行う国際協力の仕事に向かい、入社してから6年半後に現在の職に転職しました。企業ではこの他、議論の進め方や資料作成についてなど、様々なことを学び、これらは NGO で働く上でも欠かせないスキルになっています。

今は、多くの人に「難民を助ける会」の活動や途上国の現状について知ってもらい、共感して下さった方々と途上国の方々、双方に互いの気持ちを届ける架け橋ができればと思っています。しかし、国際協力への関わり方は様々であり、これからの経験や人と出会って、また関心は他に向かうかも知れません。今後の自分の変化が楽しみです。

何か一つやりたいことを自分の中にもっていれば、関わり方は様々です。進路や就職活動で悩んでいる皆さん、今見えている選択肢は夢を叶えるためには遠回りに見えるかもしれませんが、どうか楽な気持ちで一步を踏み出してみてください。どの道を選んだとしても、また新たな選択肢はこれからたくさん見つけられると思います。

難民を助ける会 → <http://www.aarjapan.gr.jp/>

(2011年8月19日原稿受理)

(国際学部 国際社会学科 2000年3月卒業生)

フォーラム 2011年の長月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)今回は、伊藤研究室 OG の古屋敷 幹さんとブラジルでボランティア活動をされてきた友松研究室 OG の半澤典子さんをお願いしました。

「上海 10 年。～イチ外国人がみた上海の変化～」

古屋敷 幹

私が留学のため初めて上海にやってきたのは2001年。それから10年の年月がたち、私も、そしてこの街もたくさんの変化がありました。今回は、上海の街がこの10年で迎えた変化を、イチ外国人の個人的な目線でお伝えしたいと思います。

変化その①「マイカーの普及がすごい!!」

私が上海にやってきた2001年当時、自家用車を持っている家庭はごく一部に限られていて、車を持っている＝お金持ち、というイメージがありました。

しかし10年後の現在、自家用車はごく一般的な収入のサラリーマン家庭にも普及し、一家に2台という家も珍しくなくなりました。現在、上海郊外の日系企業で働いています

が、工場のワーカーさんたちの中でもマイカー通勤している人が珍しくありません。

かく言う我が家も、去年長男出産をきっかけにマイカー購入に踏み切りましたが、その費用と維持費の高いこと・・・！まだ日本のように中古車市場が成熟していないので、ほとんどが新車購入です。そして上海の場合、ナンバープレートはオークション制で、現在約5万元（約60万円！！）ものの値段がついています。これでも、毎月6～7000枚ほど発行されるナンバープレートはあっという間に入札されてしまうのです。

マイカー普及は上海経済発展の象徴の一つであるといえるでしょう。

変化その②「公共マナーとモラルの浸透」

例えば地下鉄の乗り降りや、例えばコンビニのレジで・・・。10年前の上海では「並んで順番を待つ」という現象を目にすることはほとんどありませんでした。のんびり並んでは永遠に用が足せないのです。横入りや割り込みを警戒しながら自分もチャンスがあれば少しでも前へ進む。本当に精神と体力を消耗する行為でした・・・。

しかし10年後の現在、上海の地下鉄では「先上後下」のマナーがかなり浸透し、みんな扉の来る位置に2列になって整然と並んでいる姿を見ることができます。エスカレーターでも「左行右立」のマナーがずいぶんと浸透し、皆さん右側一列に整然と並んで、先を急ぐ人に左側をあけています。

コンビニや銀行でもきちんと並んだり、番号札をもって静かに順番を待つ、ということが当たり前の現象になりつつあります。モラルやマナーの浸透は、上海市民の心の豊かさ、余裕を象徴しているようにも感じます。もちろん、その裏には経済発展による生活水準の上昇という要因が隠れていることは言うまでもありません。

ほかにも、サービス業の変化や公共交通網の発達など、書きたいことはいろいろあるのですが文字数の関係でこの辺にしておきます。なお、今回書いた内容は外国人として上海に暮らすイチ個人が感じたことつつらと書き連ねただけです。すべての上海やまして中国全体を象徴するものでは決してありません。上海は訪れた人の数だけいろいろな顔を持つとても魅力的な街です。これからも発展を続ける上海とともに、私もさらに成長していきたいと願っています。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第3期修了生)

(2011年8月5日原稿受理)

「ブラジル日本移民史料館でのボランティア活動」

半澤 典子

私は、2009年3月、大学院国際学研究科国際交流研究専攻(友松研究室)の修士課程を修了後、独立行政法人国際協力機構(JICA)の日系社会シニアボランティアとしてブラジル連邦共

和国サンパウロ市にありますブラジル日本移民史料館に配属され、2年間の任務を終了して本年7月に帰国しました。この間の活動について以下に報告いたします。

日本人のブラジル移住は1908年6月18日にサントス港に上陸した笠戸丸移民が原点とされ、2011年で移住103周年目となります。このような中で、ブラジル日本移民史料館は、「ブラジルに移住した日本人がその開拓の歴史を通してブラジルの産業・文化・社会に残した足跡を記録し、その子孫たちが先祖の実績を踏まえ、日本との交流を保ちつつブラジルの発展に貢献できるための拠点を作る」ことを基本テーマに掲げて1978年6月18日に開館しました。

当史料館は日本とブラジルの文化交流の拠点である日本ブラジル文化福祉協会の7～9階に展示場、3階に文書史料の分類・保存・研究を担当する史料室、物品史料の収蔵庫、業務全般を掌る事務室があります。展示場と史料室等が空間的に分離されているため機能上の問題点は多少存在しましたが、運営はスムーズに行われていました。

私の任務は3階の史料室における作業が中心でした。2年間の業務を大別すると1)書庫整理とアーカイブ化に関わるデータベース作り、2)所蔵写真のアーカイブ化に関わる人物判明作業「この人は誰？」の公開協力事業とデータベース作り、3)調査研究者等への資料検索・提供協力とアドバイス、4)移民史料館(7～9階)観覧者への日本語ガイド等となります。

1)書庫整理と書籍分類は、2008年の移民100周年記念事業に翻弄されて全くと言ってよいほど手つかずで「ごみの山」のようであった史料室内の書籍類の整理・分類が中心で、①書籍・検索カードの確認、②書架清掃と書棚改善③書籍の点検・細分類(日本語版とポルトガル語版他の分類)・再展示④小冊子類の小冊子箱への収納と一覧表貼付、一覧表ファイル作成 ⑤書架の分類表示表の作成⑥佐藤常蔵文庫の改善と再展示など、約5万点に及ぶ書籍のうち約3.8万点の書籍を整理し、「ごみの山」を「宝の山」に転換させました。これらの書籍は殆どが2007年5月以前に登録され開示されていたもので、虫食いや破損の激しいもの、或は書架開示が困難な小冊子類はA4版型の小箱に収納展示しました。しかし2007年以降現在に至るまでの書籍類は、段ボールに詰められた仮収納状態にあります。

書籍の整理分類に関しては設立当初から史料館独自の分類基準があるため、それを尊重しつつ日本の図書館で採用している十進分類を取り入れて独自の分類システムを構築してきました。このシステムを自称「サンパウロ方式(半澤方式)」と呼ぶようにしました。また、2～3ページ程度の論文や小冊子類はA4版収納用箱72箱に分類収納した結果、利用者・職員からはわかりやすくなり調べやすくなったと好評を得ました。

2)写真による人物判明作業「この人は誰？」の公開協力事業では、毎週水曜日上映された「水曜シネマ」の開始前15分程度を利用して実施し、判明結果はデータ処理してアーカイブ化の資料原簿としました。また、写真の存在位置を示したオリジナルな地図『ブラジル日本移民史料館所蔵写真所在地分布図＝サンパウロ州・パラナ州北部』を作成し提示

したところ写真の存在位置がわかりやすくなったと大好評でした。しかし、人物判明に関しては 1920 年代からの古い写真が多かったことと、協力者(戦前移民の子孫や戦後移民)の高齢化に伴い情報量が少なくなっていること等により困難を極めましたので諸策を講じた結果、2009 年 8 月から 2011 年 5 月末までに 1,345 名を判明させることができました。

3)調査研究者等への資料検索・提供協力とアドバイスに関しては、随時実施してきました。調査研究では中学生から大学生による日本文化についてのグループ研究活動が盛んなことに驚きました。彼らは事前にテーマを決めて役割分担をして調査して行きます。中にはビデオを持参して自らの活動状況を収録して行く学生たちもいました。アメリカやヨーロッパから調査に来られる学生(大学院生)たちも見かけられました。彼らは一般の研究者(特に日系 2 世や在伯日本人)同様 1 ヶ月から半年くらいかけてじっくりと研究する姿勢を崩さないで、そのような研究者には積極的に協力することにしていました。しかし、日本からの研究者には事前にインターネットで調べておいた書籍を数冊から 10 数冊程度購入するだけで帰られる傾向が見受けられました。時間的制約があるのかもしれませんが、せっかくブラジルまで来て史料の宝庫を目の前にしながらそれを見ずして帰ってしまわれる姿勢に疑問を持たざるを得ませんでした。時には日本のテレビ局取材などもあり、活気に満ちた日々でした。

また、ファミリーヒストリーを確認に来られる 2 世や 3 世も多数いました。彼らの多くは日本語の読解が困難であるため、彼らの要望に沿って関係資料を検索してあげますと、大満足し、時には感激の涙を流して感謝しつつお帰りになられる方が多くおられました。移民史料の存在価値を実感させられるひと時でもありました。

4)移民史料館(展示場)でのガイド業務等は日本人観光客や進出企業関係者・報道関係者、公共団体さらには日系人が来館された時や日本人学校の生徒の社会科見学等が予約されていた場合に協力しました。初めて訪れる方が大部分ですので、ニーズに応じて解説をさせて戴きましたが、わかりやすい説明と感謝されることが多く遣り甲斐のある仕事でした。

活動を続ける中で日本人移民の足跡を確かめたくなり、週末や連休を積極的に活用してサンパウロ州の開拓鉄道(10 本)沿線ばかりでなく隣国パラグアイ、ボリビア、アルゼンチンの移住地やその跡地を巡る旅をし続けました。

また、日本文化の普及活動として俳句会や茶会・華道展、日本語弁論大会、運動会等にもブラジルの人たちと共に参加協力をいたしました。

これらのボランティア活動を通して、大学院時代に学んだ情報処理の技術や古文書解読の特訓、ラテンアメリカ研究が現地で活かされたことを嬉しく思います。特に友松教授には 3 年間お世話になりましたこと、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

(国際学研究科 国際交流研究専攻 第 3 期修了生)

(2011 年 8 月 22 日原稿受理)

New

EU 支部だより

第 38 号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行することになりました。今回の第 2 号の内容は、1 イタリア 福島の子供たちを招待 2 EU 支部だより -外国人の観る原発事故- です。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

●編集者のひとりごと

今号は過去最高の頁数になりました。多くの執筆者のお蔭です。改めて、投稿ありがとうございました。今回の編集方針は、特に「海外便り」と「海外留学今昔」は韓国編ということで、情報提供において丁 貴連先生には大変お世話になりました。心から感謝申し上げます。次回 40 号はチェコ編を予定しています。

話は変わりますが、最近フェイスブックを始めました。旧友や知人を探すのには、最適なツールです。また、海外在住の友人とのコミュニケーションにも同様です。前提条件には電子メールをしていることが必要不可欠ですが。例えば、1 期生(国際社会研究専攻)の李鐘元さんや 2 期生(国際社会研究専攻)のシャリファ・エズュータ・ワファさん、3 期生(国際社会研究専攻)のイスマイル・ビンティ・ノルファリザ・ファウザさんなどとの再会が挙げられます。いずれの方々も、現在はそれぞれ、韓国・ハンガリー・マレーシアの海外在住者です。

今号に投稿いただいた国際学部出身の後藤さんの場合、偶然にも「友達を検索」でめぐり合わせたうれしい出来事です。大学院出身の編集者が国際学部の卒業生・在学生に知遇を得ることは大変困難をとまなうものだからです。

国際学部同窓会は会費を納付した方のみを同窓生としています。それに対して、当会は国際学研究科の入学者を同窓生とし、学部出身者の二重の会費納付を避けるために、会費を徴収しないボランティアの形態をとっています。主な活動はメーリングリストの登録と知求会ニュースの配信です。当会の会員構成は社会人 4 割・外国人 4 割・学部出身者 2 割になっていることから、電子メールの重要性を理解していただけたと思います。編集者は常々、ネットワークの大切さを訴えてきましたが、改めて会員の皆様、そして学部卒業生・在学生にネットワークの意味を再考していただけたら、うれしい限りです。

編集後記：2010 年 4 月 26 日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://www.afis.jp>) で見られるようになりました。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。**
chikyukai@yahoogroups.jp